図書「こんな夜更けにバナナかよ」を推薦します

施設を飛び出し、自立生活にﾁｬﾚﾝｼﾞする気管切開による人工呼吸器を装着した筋ジスの青年と、ボランティアとの生活を、（この本の原稿を書き続ける中で、青年が逝去したので結果としては）２年半の取材を元に書かれた本である。

ﾙﾎﾟﾗｲﾀｰは、なぜ多くの若者達が青年の所にボランティアに来るのか、その世界には何があるのか、の疑問と好奇心で取材を始めたようです。

ルポライター自身が時に、介助にあたるボランティア（主に大学生）のローテイション（一日３交代制計４人）に加わりながら、本人、ボランティアに取材し、また、ボランティア同士の連絡帳である７年余り書き継がれた百冊近い「介助ノート（時に、本人－口述をボランティアが代筆－と、ボランティアとの意見交換の場でもある）」を引用しつつ書かれている。書名「こんな夜更けにバナナかよ」から分かるように、「支え合い、エゴをぶつけあう『戦場』」のルポです。

それだけに、最近しばしば耳にする、在宅での医療的ケア、ノーマライゼーション、地域での生活、ボランティア活動、訪問看護制度、ヘルパー派遣制度、今の世の人間関係、等々が、青年の「命を削ってまで」の日々の生き様の前では、いかに希薄なものであるかを否応なく我々や社会に突きつけられる。

正にそのことを、青年は自らの常時医療的ケアを必要とする命を、また、ボランティアの全面介助による生活を実験台とし、更に、「家」を実験場としてそれぞれがエゴを持ちながらも人と人が支え合う「人類が生き残るための最後の手段」を、ボランティアと壮絶とも云える係わり合いの中に見つけようとし、「日本の福祉社会を変えたい」との一念で自立生活にチャレンジしたようです。

単に青年とボランティアのルポだけでなく、海外、国内の自立生活運動の歴史、また、最近の障害者を取り巻く医療、福祉、制度等の語彙の解説が本文に対応にして挿入されているので、大変解り易く参考にもなります。

僕がここであれこれコメントするよりも、ともかく、ご一読をぜひお勧めしたい本です。

（早速メル友から、この図書が第 25 回講談社ノンフィクション賞を受賞したとの情報提供があった。）

（2003 年 09 月 17 日　記）